

重度・重複障害幼児の集団療育（2）

— グループ参加をととしての母親の動き —

後藤 秀 爾¹⁾ 村 上 英 治 讓 西 賢²⁾
藤 本 章 子³⁾ 柳 沢 好 子⁴⁾ 高 木 昌 子⁵⁾
服 部 孝 子⁶⁾ 北 村 由 紀 子⁷⁾ 田 垣 裕 美⁸⁾

両親こそ

この子どもたちの防壁であり、
生きる力である。

— 福井達雨著 「子供に生かされ子供を生きる」

柏樹社刊 より —

はじめに

障害児を持つ親たちは、社会の差別と偏見の中で生きていかねばならない。障害児を持った事自体が、両親にとっては、多大なストレスとなっている。その障害が重ければ、それだけ、発達しない子どもの将来に、不安が高まる。障害児を持ったことにより生じてくる家族間の葛藤や混乱、そのきょうだいたちに及ぼす影響についての心配など、さまざまなストレスの中に、必然的に投げ込まれることになる。それ故に、とりわけ重度・重複の障害児の親は、過保護・溺愛に陥り易いと言われる。しかし、それは決して一律に論じられるものではない。

さまざまな生き方の両親がいる。西村（1975）は、障害児の両親に9つのタイプを見出している。①疲れてしまった両親、②投げってしまった両親、③信じてしまった両親、④子どもピタリ型の両親、⑤泣きじょうごの両親、⑥ひじでっぼう型の両親、⑦子どもと一緒に歩いていく両親、⑧子どもたちに感謝する両親、⑨運動型の両親。どの両親も、障害児をもったことに衝撃を受け、苦しみ、悩み、その中で、自分達の生き方も見出していっ

たものであろう。障害児を持った両親の80%以上が、一度は自殺を思い立ったことがあるという（中村、1972）。それらの苦しみを乗り越えて行った人がある。あるいはそれに負けてしまった人がある。すべての障害児の親たちが、たとえどんなに苦しみ多かるうとも、それに負けず、それらの若悩を乗り越えていってもらえるような援助の手を、ささやかなりとも差しのべたいというのが、私どもの願いである。

“この子供たちを持ったが故に、その差別の中で、この子供たちと共に、もがき苦しんで生きている人がたくさんいる。悩んでいる人、涙を流している人がたくさんいる。その人たちと誰かが共に、涙を流し、共に悲しみ、共に喜ばなければいけないんだ”と、福井（1975）は述べる。障害児の問題は、まさしく私ども、ひとりひとりの問題にはかならない。私どもは、せめて、今、ここで出来ることを見つけ、それに精一杯取り組んでみたいと思うだけである。それは、同じ社会を、同じ世界を、共に生きていこうとする者として、当然の義務といってよい。

I 問題意識

— 母親グループのあり方をめぐって —

村井（1972）は、障害児の親の指導にあたり、親に孤立感を与えないための仲間作りと、絶望感を感じさせないための、子どもに対する指導の場の保証という2つの条件が必要であることを強調している。親にとって、信頼できるスタッフが、全身全霊をかけて子どもに取り組んでくれていることを実感できることは、まず、必要な

- 1) 安城学園女子短期大学
- 2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期）
- 3) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期）
- 4) 名古屋大学臨床心理相談室
- 5) 岐阜市立恵光学園
- 6) 名古屋大学教育学部研究生
- 7) みかずき保育園
- 8) 国立秩父学園

ことに思える。また、共に支え合っていくことができる仲間の存在を確認できることも大切なことである。これは、障害児を持った母親を援助するための基本的な条件であるとも言える。一般には、母親同士の仲間作りと、相互の情報交換あるいは学習会の場として、母親グループによる話し合いの場が、準備されることが多い。そうした母親同士の話し合いの場の中で、母親たちは、心にゆとりを持ち、安定した子どもとの接触を可能にしている。また、子どものありのままの姿を受け容れ、より適切な接し方を身につけていく。そうした成果については、従来、多くの報告の中で指摘されてきたことである。

母親同士の話し合いの場が作られること自体、この意味において、大切なことである。それも、すすめられての参加といった受動的な場でなく、母親自身が、積極的に、その話し合いに加わり、その場を自ら作り上げていこうとすることは、母親同士の交流を、より生き生きとしたものにしていく上で、必要なことと思われる。単に、お互いが、なぐさめ合うための集まりではなく、前向きに、子どもにとってのより良き発達のために、行動していけるような集まりをこそ、作り上げて行かねばならない。

基本的には、子どもの療育をすすめていく上での、療育グループ全体の構えの問題として、私どもは、今、こうした問いかけを受け止めている。私どもの側から、呼びかけ、支えていくグループにとどまることなく、親と療育者とが、ともどもに、作り上げていくグループであるということ、メンバー全員が、確認し合いながら、私どもは、ここ数年来の療育活動をすすめてきた。従って、グループカウンセリングといった単なる話し合いの場だけを、母親援助のための場とするにとどめず、療育活動の準備や、行事等の企画、後片づけその他も、重要な母親の療育への参加の活動であることを常に念頭に置きながら、すすめてきたものである。子どもの療育活動を、あくまでも中心にすえながら、グループ活動自体に、母親たちを巻き込んで行って、その積極的、主体的参加を促すような働きかけが、私どもの主たるねらいであるとするのも、この故にである。

“子どもたちのために、共に何かをなしとげる”体験は、療育者をも含めたグループ全体の凝集性を高め、より深いところでの結びつきを強める。たとえ、重い障害を持ってしようとも、子育てとは、それほど複雑なことでも、深刻なことでも、本来は、ないはずである。ごく単純で、あたり前なことを、みんなで、自由な雰囲気の中で、気軽に、楽しみながらやっていき、その子の成長を喜んだり、停滞や後退を、嘆いたりしていくことが、きわめて自然でかつ、本質的なことのようにも思われる。

そうすることが、“子どもたちと、ともに生きて成長している”という実感を、これにかかわる私ども全体で抱けるようになっていくための道筋であるように考えられるのである。

その子どもが、障害児と呼ばれる子どもであろうとなかろうと、一般に、こうして母親の子育てを援助しようとする私どもの考えるべきことは、この子どもを自分の手で育てる自信と意欲を、母親自身が回復することの援助に尽きると思う。障害が重ければ、重いほど、この子は発達が遅い、否、少しも発達しないという実感を、母親は強く持つことになる。そこから抜け出せないでいる限り、母子双方の成長は、行き詰ってしまうのである。発達しないとしか見ていなかったわが子の成長が見え始め、それを共に喜んでくれ、あるいはまた、それが見えなくなってくれば、共に心配し、悩み、悲しんでくれる仲間の存在を感じ、母親は、その子と共に成長していける実感を持つに至り、その子と共に前向きに生きていく力を得るものであることを、このとき確く信じておきたい。

こうした考えから、私どもは、母親グループのすすめ方の原則を、次のようにたてた。

- ① 療育時間中は、完全に子どもとの接触から離し、子どもの療育は、全面的に療育者側に任せてもらうようにすること。
 - ② 子どもを安心して任せてもらえるよう、子どもについての情報交換を、療育担当者との間で、できるだけくわしく行ない、また、母親も参加しての療育活動の機会も、その中にはさんでいくこと。
 - ③ 日常療育の準備や後片付け、また行事の企画や、運営などへの参加を求め、みんなと一緒に、作り上げるグループであることの認識を深めてもらうこと。
 - ④ 母親同士の話し合いの場は、できるだけ自由な雰囲気の中で、お互いの人間性に触れ合えるような、いわば出会いの場となれるように、すすめていくこと。
- こうした視点は、基本的には、私ども療育スタッフ全員の療育にあたる根本的な姿勢の問題であるといってもよい。

重度障害幼児を対象とする母子通所形態の集団療育を、私どもはここ10年、このようにしてつづけてきた。本報告は、昭和54年度の1年間の経過を追って、特に、母親のグループ参加のあり方を主題として、検討を試みようとするものである。

Ⅱ 母親グループの1年間の経過

1. グループの構成とタイムスケジュール

私どもの療育グループは、原則として、1年間に療育

の終結をめざしてきた。年度の終りには、より制度化された療育の場へ子どもたちを、送り出すことを、そのめやすとしていることもあり、成果の上った子どもは、その年ごとに、療育を打ち切ることになる。担当者側も、教育、研究の場のメンバーである性質からして、当然、年度の終りに入れかわることもある。もちろん状況によっては、どちらの側でも、2年、3年と継続することもあるが、こうした1年ごとを、ひとつの区切りとして、この年度も、新しく、参加希望者を求め、継続療育の1名を含め、計6名を受け入れることになった。

今年度の療育対象となったこれら6名の子どもたちは、発達年齢から見て、おおむね2ヶ月から1才前後程度の水準にある、きわめて重度の発達障害をになった子どもたちであった。ただ、療育開始後2ヶ月で、うち1名は転居して、離名したため、今回の検討の対象からは除くことにした。これら子どもたちの概要については前報告表1を参照されたい。これら子どもたちは、これまで、主として医療的ケアを受けてきたのみで、こういった集団療育の場に参加するのは、前年度から継続のナナを除き初めての体験であり、母親の側にも、そのことによる戸惑いが、当初かなり認められている。

これら母親を対象として、母親グループが構成され、集団カウンセリングの話し合いの場を持ってきたが、そこには、主として1名の担当者（後藤）が常時、参加して、カウンセラー的役割を果たしてきた。また今1名（村上）は、療育者全体の統括をする傍で、時折、そのグループの話し合いにも参加した。今年度の対象児についての概要は、先の報告「重度・重複障害幼児の集団療育(1)」を、参照されたい。

今年度は、毎週火曜日の正午から午後3時までの3時間を療育の時間にあてているが、その間の母親グループのタイムスケジュールは、原則として、表1のごとくである。

表1. 母親グループのタイムスケジュール

・12:00	来棟
・12:00～12:10	母親と療育担当者間での情報交換。
・12:10～12:30	母子分離。 子どもの食事の準備。
・12:30～13:20	母親の食事（子どもと別に）。
・13:20～13:30	子どもの食事の後片付け。
・13:30～14:50	母親グループでの話し合い。
・14:50～15:00	母親と療育担当者間での情報交換。
・15:00	離棟

特に、子どもの担当者が、子どもとの取り組みに慣れるまでは、母親との間の情報交換の時間を多くして、それぞれの家庭における日常的なルティーンとしての具体的な接し方をくわしく教えてもらうようにした。母子分離に抵抗を示して、母親がつき切りにならなければならないような状態を示した子どもはいなかったが、この療育の場にいつも付いてきていたナオヤの妹が、分離に抵抗を示し、時間中母親について歩き、離れて子どもグループに加われないことがよくあった。母親たちは、それぞれ持参の手作りの子どもの昼食を準備すると、毎回連れ立って、キャンパス内の学生食堂へ出かけて行き、のびのびと歓談の時を過ごしていたようである。この時間は、母親たちにとって、あらゆる日常的な拘束から離れて、実に解放されたひとときであったようで、その後の母親担当者を交えた話し合いも、いわゆる“集団カウンセリング”と言ってしまうにはふさわしくない、きわめて自由で気楽な雰囲気のものであった。

また、グループの中では、それぞれの母親の気持ちを十分にとらえ切れない面があるため、それを補う意味でも、子どもごとに連絡ノートを作り、毎回自由に記述してきてもらうようにした。療育者側も、毎回、母親に対し療育場面での子どもの様子を知らせ、療育方針を理解してもらうために、このノートを積極的に使うようにした。実際、記述された内容には、さまざまな水準のものがあつたが、概して、療育者と母親との間に、何でも話し合える雰囲気が出来てくると、記述内容も、単なる行動レベルの交流にとどまらず、母親の内面的な、情緒的動きまでもが、ノートの中に書かれるようになってきている。

2. グループ全体の1年間の流れ

子どもの療育は、この1年間で、1泊2日の合宿療育を除いて37回行なってきた。8月の1ヶ月間は、夏休みをとったが、その間に、家庭での日常的場面の“子育て”の様子を知る意味もあつて、療育スタッフ間で分担の上、それぞれの家庭訪問を行なっている。また、子どもの療育に、母親も一緒になって参加したこともあり、更には、母親の担当者が、この療育にやむを得ず参加できなかったりした時もあり、母親グループの話し合いは、そのうち22回持つことができた。

以下に示すのは、母親グループ全体の話し合いを軸にしての経過の概要である。回数は、全体の療育回数に合わせて記録してある。

- ・I期（1～4回）〈これから始まるのは、ひとつの教育なのだ〉

第1回（5／8）は、子どもの療育担当者が、まず母親から、それぞれの子どもの、家庭状況における接し方についての情報提供を受けた。その中で、集団療育のねらいと、私どもの考えている意義についての説明を行っている。第2回（5／15）から、一応“集団カウンセリング”といってもよい、母親に対するグループ面接を始めた。そこでは、私どもが、この話し合いを通じて、何がしたいかについて説明を行なった上で、母親たちから、それぞれの子どものこれまでの様子を語ってもらった。4回目（5／29）位までは、新しく加わった母親には、これからここで何が始まるのか、戸惑いも見られ、話し合いの内容も、ほとんどが、子どもの障害についての説明に留まっている。

これら障害の重い子どもたちに対して、私どもが集団療育の形で何ができるのか、まだ判らない、この子どもたちが、それなりに生きる喜びのようなものを感じてくれるように働きかけてみたい、また母親たちの話し合いの場は、相互理解を深める場になれば良いと思っているので、気楽に何でも話し合える雰囲気を作っていきたいとの趣旨を、機会あるごとに、一貫して説明していった。当初は、母親担当者からの、積極的、指示的な指導、助言が受けられるのかと期待していた母親もいたようであるが、前年度から参加しているナナの母親のリードによって、母親相互が、自主的に、自分の子どもを育てる上での苦勞を、伝え合おうとする雰囲気が出来てきたように思われる。

ナナの母子分離への抵抗とカンシャクが、療育へ通う間に次第に収まってきたこと、イタズラに腹が立ってきて、“イヤなっちゃう”気持ちなどを、あけすけに話すナナの母親に、他の母親たちは、若干の戸惑いと抵抗を示していたように、最初の段階では感じられた。しかし、その発言に触発されて、“何をしても、何もしなくても、1日中不機嫌に泣いてばかりいる時のある”ユリコやナオヤに対する母親たちのやり切れなさ、4年間、病院での指導を受けてきても、いまだに生まれたばかりの時のままで首も座らないリカの母親の無力感などが、どちらかと言えば、その内容にそぐわないような活発さで語られ始めた。リカの母親が、その時期の連絡ノートにしみじみも記しているように、“これから始まるのはひとつの教育なのだ”といった、即ち今まで受けてきた医療的ケアとは異質のものだという一種の期待と、その反面での不安や戸惑いとが、まがりなりにも、それぞれの母親の中で整理されてきた時期にあったといえよう。

・Ⅱ期（5～10回）〈みならわなくっちゃ。そういうことやってみよう〉

5回目（6／5）には、アサコの母親から、アサコの姉に対するしつけの問題が語られ、そこから、きょうだいのしつけについての悩みが、それぞれの母親から次々に語られ始めた。姉には、障害児も同じきょうだいとして大事にするよう教えている、近所の人にもアサコのことを隠したりしないと語るアサコの母親である。弟にきかれた時、寝た切りのユリコの状態を、どう説明したらいいか困るというユリコの母親。1才前に病気をして、その後遺症だと説明しているというナオヤの母親。この子の兄の成長に関しては、安心して見守っていられるリカの母親。それぞれが、自分の場合の考え方を出し合って、ひとつの問題を、全員で共通の話題として考えあっていく構えが、自然に固まってきたように思われる。

ちょうどその頃から、夏休み中の一泊合宿療育の計画を、母親グループで持ち出し、それを中心に話題が展開していく。外へ出ることはこわいというリカの母親に対し、ほかの母親たちが、思い切って出てみることを意味を、それぞれ力強く述べて励ましてくれる。行き先のこと、宿のことなどを考える中で、お弁当の話、薬の話、水泳教室の話などに話題がとび、そこからまた話題が広がっていく。

オムツはずしの対策について、よく病気になることの悩みについて、ひきつけへの対策について、睡眠時間の不規則さについてなど、具体的に意見交換が行なわれるようにもなった。そうする中で、ナオヤやリカが、すこしづつ発達の兆候を見せてきたことを、みなで喜んだりもした。お弁当の献立の作り方を教えあったり、病院やかかりつけの医師の品評を行なったりして、雑然とはしているが、和気あいあいとした談話が続くようになり、おたがいのやり方に刺激され、良いところを積極的に学び合おうとする雰囲気が、ひとりひとりの母親の中で高まってきた様子が見られてきた。水泳教室に申し込んでみたというナオヤの母親の姿勢に感ずるところがあったというユリコの母親、ユリコのお弁当に触発されて、食事のレパートリーを拡げる努力をし始めたというリカの母親などの発言に、その具体的なあらわれを見ることが出来る。

そして、ナナの母親の尽力などもあって、これら重度、重症の子どもたちにとって果たして可能かと、初めには心配され、論議もつづけられてきた1泊の海水浴が、7月24日と25日にわたって、具体化する運びとなる。

・Ⅲ期（療育合宿及び、11～15回）〈母親たちの新しい冒険、父親はあてにならない。〉

1泊の海水浴は、結局、アサコが家の都合で、リカはこの段階では、最終的に母親の気持ちに踏ん切りがつか

なかったようで、参加できなかった。その合宿を終えた後、1回、反省会のような時間を持ったのを最後に、8月の1ヶ月間は、夏休みとし、その間に家庭訪問を行ない、9月から再会することとした。合宿療育は、まさしくてんやわんやで、子どもたちも、1週間位は、後遺症が残ったと見受けられたが、母親たちにとっては、それこそ得難い体験であったようで、その後の話し合いに、一段とはずみがつく原動力になったと思われる。特にこの頃から、母親担当者は黙っていても、母親同士が話をどんどん展開させていき、母親グループみんなで笑い転げるという場面が多くなってきている。親同士の個人的な親交が深まっていったのもこの頃で、ユリコの母親を中心に、さかんに家庭へ行き来して、いっしょにお茶を飲んだり、しゃべったりする時間を作っていたようである。

この時期の話題は、きょうだい間のやりとりの面白さ、お産の時の様子、歯医者についての情報交換、この子たちを連れての外出の時の苦労話、住宅環境のこと、具体化してきた就園、就学の問題など、さまざまな話題が広がっている。そんな中で、きょうだいたちを、のびのび育てていこうとする母親たちの苦労や、外出した時の子どもたちの嬉しそうな反応の仕方や、父親に世話を頼んでも、ちょっと親身になってくれず、あてにできないというボヤキやらが、全員の共感を持って、とりわけ語り合われている。日頃感じている孤立感や、それを克服していく苦労話を、笑いながら披露しあう母親たちは、そうして語り合うことで、自分自身の気持ちを、存分に解放していつているようでもあった。

そういう雰囲気は、結局、母親である自分が、この子を見ていくほかに、どうしても仕方がないんだという自覚と、これは自分にしかできない役割りなんだという自信を、はぐくむ土壌となったように思われる。ある者は今まで以上に、ある者は、これを契機として一大決心をして、子どもを買い物にも連れ出し、外出を心掛けることを、自ら決意していこうとする。

・IV期 (16~21回) <この子たちは、母をわかっているか、わかっているか？>

16回 (10/2) での話題は主に、子どもの発作についてであった。発作の時は不安そうなので、ただしっかりと抱きしめてやっているというナオヤの母親、母親を求めているようなので、抱いてさすってやっているというナナの母親、どうしても発作はおさまらないのだから、ただ耐えて見守っているしかないというユリコの母親などの話をきいていると、子どもの気持ちを話題にすることが、じつに自然になされてきている。17回 (10/9)

には、近くの児童公園に、母子連れだつて出掛けていき、70mのスベリ台を、いっしょにすべったりして楽しむことができた。童心に戻ったような母親たちの笑顔は、印象的であった。それに子どもの方も味をしめて、18回 (10/16) は、リヤカーに子どもを乗せて、少し遠くまで散歩に出掛け、19回 (10/23) は、特殊学級と養護学校の連合運動会の見学に出掛けていった。これもまた、母親たちへのゆさぶりという点で、意味深いものに思われた。

そうして、20回 (10/30) には、久しぶりに話し合いの機会をもつことになったのであるが、このとき、この子たちが、母親のことを、ほかの人と区別してわかっているかどうかをめぐって、一大議論が展開された。どんなに障害が重くても、反応が違うし、かならず“生命のふれあい”があるはずだとするアサコ、ナナ、ナオヤの母親と、それは希望的観測で、入院中の方が調子の良いユリコや、扱いの上手な人なら機嫌よくなるリカを見ていると、単なる“タイミングの問題”としか思えないというユリコ、リカの母親とが、2派に分かれて、かなり熱の入った論争を展開した。その折、結論は出ないうちに、ほかの話題に移っていったものの、子どもの気持ちについてのこうした熱心な議論は、おたがいが、おたがいの子どもの事までを、熱心に考えようとしているという実感を、母親たちの中に、強く残したように思われる。

その後は、アサコの母親から、アサコの視力の問題で、担当医と言いつ争った時の話が出され、リカの母親からは、リカの生まれた時のまわりのおかしな反応から、リカの障害に気付いていくまでの経過が語られ、ユリコの母親からは、出産時の医療ミスとしか思えないユリコの障害に、何か運命的なものを感じてしまうという気持ちが語られ、ナナの母親からは、原因が判らずに、いつか気付いてみたら障害児だったというナナの発達の不可解さからの戸惑いが語られ、また、ナオヤの母親からは、最近よく動けるようになってきたナオヤの発達の喜びが語られ、お互いに、腹を立てたり、シンミリしたり、喜んだりしあう中で、気持ちの通じ合いが深まっていく様子が見てとられた。また逆に、雑談の時などは、実にたわいもない話に笑いころげ、その笑い方がおかしいと言っては、また笑いころげるという、きわめて気楽な雰囲気を持っていたため、全員が、特に構えるということもなく、自分の気持ちを表明できていけたものと思われるのである。

・V期 (22~26回) <ナオヤが、リカが、ナナが、変わってきた/>

22回 (11/13) ぐらいから、母親たちは、それぞれにお茶菓子などを持ち寄って、いっしょに食べながら談笑

するようになってきた。これまでの育児の苦労や、これから子どもが大きくなっていった時の対策やら、結婚生活のストレスやらを、おたがいに冗談をとばしたり、からかったりしながらも、みなで話し合っている。そしてまた、父親が育児に積極的でなかったり、無責任であったり、また、たとえこまめに動く父親であっても、肝心なところが抜けていたりするといった調子のお話はずんでいっている。そろそろ、クリスマス会の計画などを話しているうちに、年度始めからの子どもの様子を振り返った時、ナオヤ、リカ、ナナの3人は、母親自身、“変わってきた”という実感を持つことが、出来るということが語られるようになった。動きが活発になり、座位がとれるようになって、リハビリの先生が驚いていたというナオヤの母親。表情が出て来て、自己主張のような感じの感情表出も見られはじめ、ようやく首が座る徴候が見られてきたというリカの母親。カンシャクが減り、表情が柔くなり、かなり情緒的に安定してきたようだというナナの母親。また一方で、発作が頻発してしままだになすすべが見出せないユリコの母親。11月までは、いろいろな事情もあって、とかく休みが多くなりがちで、十分のことができなかったアサコ。しかし、それぞれに1年を振り返っては、子どもの成長を喜び合い、気持ちを新たにしている母親たちがそこにいる。

・VI期（27～37回）〈母は強し、手作りのお別れ会。〉

27回（12/15）には、クリスマス会の打ち合わせを行っている。母親にも、企画、立案と準備への参加を依頼し、食べ物の調理と飾りつけに腕をふるってもらうことになった。クリスマス当日は、朝から全員で準備をし、きょうだいたちも、ほとんど全員集まって、にぎやかな会となった。それ以後、母親たちは、事あるごとに、かわりあって、手作りのお菓子を持ち寄るようになり、その都度、子どもたちといっしょになって、遊戯室で、茶和会のようなことをして楽しむようになっている。その間に、31回（2/5）には、節分の豆まきを、35回（3/4）には、ヒナ祭りを、母親もいっしょに行っている。欠席がちだったアサコの母親も、この頃からは、きわめて積極的に来所するようになってきた。

したがって、話し合いの時間を、じっくり持てたのは、年が改まってから、33回（2/19）、34回（2/26）、36回（3/11）の3回限りにとどまった。あいかわらず、父親の話題が多く出てくるが、バレンタインデーにチョコレートを送ってやったというナナの母親の話から、給料をもらって来てくれるんだから、大事にしなくっちゃという話も出るようになって、不満ばかりを言いあって発散していた雰囲気も、かなり変容してきた。一方で、

養護学校からの訪問教師が決ったユリコ、盲学校の幼稚部への入園が決ったアサコ、通園施設への措置が決まるかも知れないといったナナを、中心に、就学、就園の意義について、多少の論議がそこでなされるようになった。また、ユリコの母親は、6月に第3子の出産をひかえ、思いきって子どもを作ることに決意した母親の気持ちがここで露呈されたりもしている。出産するのは大変なことだという話題が、ひとしきりそこでかわされた。“女の人は出産で強くなる”との全員の一致した意見が、ここでは見られた。ともあれ、そうする中で、来年度を迎える母親たちの気持ちの整理と、新たな意欲が、芽生えてきたようにも感じられたこの頃であった。

最終会（3/18）のお別れ会では、母親たちが、それぞれ手作りのケーキなどを持ち寄って、きわめて家庭的な雰囲気をかもし出し、心から楽しめる集まりとなったことを、ここで、つけ加えておきたい。

3. 母親ひとりひとりの気持の変化

これら1年の経過を、このように振り返ってみるとき、アサコの母親が、11月位まで、ともすれば欠席がちであったことを除き、ほかの母親は、この療育活動に熱心に参加してくれ、欠席することも少なかった。母親同志の自由な話し合いを心から楽しみ、あらゆる日常性から解放されたひとときを過すことが出来たということは、何よりも、この母親たちをして、こうした通所の意欲を高めさせることになったものと思われる。そして、その体験を契機として、母親たちは、それぞれに自分の殻を破って、明るくたくましく歩き始めていったようである。まだ、私どものなさねばならない課題は多く、共に歩かねばならない道のりは遠いが、ここではさらに、ひとりひとりの母親のこの1年間の気持ちの変化を、話し合いの場での発言と、連絡ノートの記述をとおして、まとめていきたいと考える。

・ナナの母親：前年度の療育グループに参加していたメンバーのうち、ナナのみが、一応継続的にここでの療育を受けることとなり、ほかの新参加の母親たちを、結果的には、リードする役割りを、とってもらうことになったのである。前年度の1年間の療育で、ある程度、ナナ自身の成長に気付かされ、このグループの雰囲気にもなじんでいたため、特に初期の頃には、ほかの母親たちに、ここでの集団療育のナナにおける成果を、説明したりすることによって、メンバーの定着に、一役かってくれていたように思われた。

開始当初は、ナナの母子分離が、まだできないのではないかと心配していたようであったが、初回から、さほ

ど抵抗を示さず分離することができ、当所での療育の意味を、改めて確認していたようである。ナナについては、そのますます盛んになるイタズラとカンシャクに手を焼き、“こちらの方が、カーッとなってしまう”と述べ、連絡ノートも、ナナの“わるさ”の報告が、主たる内容としてつづられていた。話し合いの場面でも、それとあまり変わるところはなかったが、毎回タクシーで、時間に間に合うように来所していた熱意は、やはり何か手ごたえを感じるところがあったものと推察される。お別れ会の折にも、子どもと離れて、ゆっくり食事の出来るのは、この場をおいてないことを、強調していたのも、ナナの母親であった。

たしかに、ナナの行動を見守る目が、次第に変わり始め、それに対応して、ナナの行動も落ち着きを見せるようになってくる。母親を認めて、甘えたり、笑ったり、また相手をしてもらってはしゃいだりというように、感情表出が柔くなり、笑顔が増えてくると、事あるごとにカンシャクを起こしていた頃からの変化が感じられ、ナナの“可愛らしさ”を、認識しうようになる。“よく笑うようになった”といっは、喜びをあらわしてくる母親である。

昭和55年度は、市内の障害児の通園施設への措置が決ったが、それが隔日であるため、機会が得られれば、子どもの療育にも、引きつづいて参加したい旨を、表明してきている。

・**リカの母親**：病院以外に、リカを連れて外へ出たことが、これまで2回しかなかったというこの母親にとって、毎週この療育に通うこと自体が、大きな生活パターンの変更を迫るものとなったといっは間違いはない。いつ熱を出して調子をくずすかわからないリカの健康状態に気を使いつつも、“これから始まるのは、教育の場での、療育なのだ”、“皆さんの熱意のもとでなら、仮にリカが死ぬような事故が起きてても後悔はないといった気持ちです”というように、不安な中にも、大きな期待を込めて私どもの療育グループに参加し、通い始めている。

ただ前半は、まだリカの事が近所に知れたりすることに抵抗を示し、療育の行き帰りは、すべてタクシーを用いざるを得ないでいる。夏の合宿にも、どうしても思い切って出掛けることが、結局のところ出来なかった。しかし、ほかの母親たちの前向きの姿勢に、いつとはなしに触発されて、リカの食事のレパートリーを増やし、また、リカを連れて外での買物や散歩などにも、出るよう努力するなど、次第にたくましく、目を外へ向けての行動が始まってきている。年度の後半では、このグループへの通所も、あえて公共の交通機関を用いるように努力

しようとしてきている。何はともあれ、“親同志の横のつながり”に、ずいぶん励まされての母親の変化であったと理解される。

最後のノートの記録の中で、この1年間を振り返っての自分自身の回想として、リカの変化を第1にあげている。何よりもまず、食事の内容が広がったこと、そして生活のリズムが出来たこと、刺激に対する反応がはっきりして、表情が出て来たことなどが、母親自身によって指摘されている。そしてさらに、母親が自分自身の変化として、リカを連れて歩くことが出来るようになったこと、“この子が居ては何も出来ない”という思いから抜け出せたこと、親同志のつながりを知ったことをあげ、この療育に参加したことの意味を、いみじくも言い表わしているのである。

昭和55年度も、母親の希望により、療育を継続する予定になっている。

・**ナオヤの母親**：最初から、自信をもって安定してナオヤに接しているという印象の母親であった。ナオヤのために購入したというライトバンを自ら運転して通っており、ナオヤのためなら、どこへでも気軽に掛けていくことができる母親である。話し合いの中でも、ナオヤと妹とのかかわりや、近所の子どもや、その親たちとのかかわりを、さり気なく語り、障害児を持ったことで悪びれたりすることのない生き方は、ほかの母親たちにきわめて良い影響を与えてくれていたようである。

夏休み過ぎ位から、次第に、ナオヤの運動機能の発達や、イタズラの活発化が目に見えて起こってくるようになってきた。“リハビリの先生が、びっくりして、どうしてこうよくなったのか、私はもう自信をなくしたなんて言っていた”といったことを、心から嬉しそうに語り、この療育の成果として見ていてくれたようである。この1年の終りには、“少しづつですが、希望を持つことが出来るようになりました。”“これから先も、のんびりとナオヤといっしょに、進んでいきたいと思ひます”とのまとめが記されていた。わずかづつではあっても、ナオヤの発達の見えていることが、この明るい母親の態度を、支えてきたものと思われる。

昭和55年度も、ひきつづいてこのグループでの療育を継続する予定でいる。

・**アサコの母親**：子どもの育て方、自分の生き方についても、信仰による裏付けを持っているためか、最初から一貫した理念を持つ母親であった。障害児だからといって、アサコを特別扱いしない、姉には障害児をも大切にしたい思いやりを育てたい、アサコの事を誰にも隠さず、

堂々と前向きに生きていきたいとの趣旨の発言をして、ほかの母親たちの賛同を得ているが、とかくいろいろの事情もあってか、療育には欠席がちであり、10月位までは、3回に1回程度の割でしか出席してもらえなかった。

Ⅳ期の“母親をわかっているかいらないか”をめぐるの論争の時には、“わかっている”と主張する側の先頭に立って、熱心に力を込めて、“生命のふれあい”が必ずあることを説いていた。この論議の時を境に、療育への参加の意欲は、大きく高まり、熱心に通うようになってきている。またその頃から、子育ての失敗談や、苦労話などを、打ち明けて話してくれるようになり、それまでのどちらかと言えば理念的に傾くといった話が少なくなってきている。冬休み明けからは、療育スタッフのリクエストにこたえて、手作りのお菓子や梅干しを、持参して置いていってくれるまでにグループに溶け込んできたようであり、ほかの子どもの発達を、涙ながらに喜んでくれる母親として、グループ内での位置付けが意味あるものとなってきたように思われる。

・ユリコの母親：最初、このグループの中で、子どもに対する接し方の指導が、指示的、積極的に与えられることを期待して参加したようで、はじめのうちは、若干、何を話していいのかためらいがあったように見受けられた。しかし、小さな発作が頻発し、了解不能の不機嫌さを呈するユリコの状態像について、母親なりに話し合いの場の中で考え、発作への対応の仕方をかためていったようである。

母親グループの中では、潤滑油的な動きを、一貫してつとめてくれたようで、療育の場を離れたところでも、母親同志の交流を積極的にすすめてくれていたとのことである。この療育の時にも、手作りのお菓子を持ってきてくれるようになったのも、このユリコの母親が最初であった。私どもの目から見ても、ほとんど表面的には変化の認められないユリコを抱えて、発作に心を痛めつづける母親にとって、仲間との心暖まる交流は、何ものにもかえがたいものであったのだろう。このグループの中で、“何か心の安まるもの”を感じ、積極的につながりを求めていったものと理解される。そうして、このユリコの母親の中で、何か心境の変化があったのか、いろいろと悩みを訴え、不安をもらしながらも、この55年6月には、第3子を出産することを、自ら決意したものである。新しい生命を胎内に育みながら、決意と不安の相克が自覚されているが、今、ひとつの山を乗り越えようとの頑張りが、痛々しいまでに、私どもに伝わってくるのである。

養護学校の訪問指導が、決った時も、そのあい間に、

55年度も、当所の療育へ通いたい旨を表明している。こんな形ではあるが、まがりなりにも就学期を迎えた3月中旬頃の、連絡ノートに記された母親の心境は、次のようなものであった。

“卒園式、入学式等、春の声を聞くと、あきらめていたはずのユリコのことを悲しく思われる日々です。”“ユリコの知的な成長は少なくとも、一週間に一度でも、この子の為に（自分の為でしょうか？）出かけているということが、心のハリみたいなものでした。”“自分の人生等は、自分で作り上げていくものであると、私は、ユリコが生まれるまでは考えていました。ユリコが生まれた時、自分が作ろうと思っていた家庭に一步前進し、限らない夢がふくらみました。しかしこの子が脳性マヒとわかった時、何もかもがペチャンコになり、夢や希望や、自尊心さえ、何もかもがなくなりました。そしてユリコの弟が生まれ、少しずつ私達も立ち直ることが出来てきたのです。「もう子どもは要らないぞ」と主人は言っていました。今度生もうとする3人目の子は、私自身の希望です。元気な子であってくれば、また、私たちの生き方は変わっていくと思います。不安ばかりですが、子どもが生まれるまでは何もかも無です。無でないと6月までの3ヶ月間は、あまりにも苦痛ですから。今の私は、まちがいのなく情緒障害母なのです。”

Ⅲ まとめと考察

1. 母親のグループ参加のあり方とグループの凝集性

重い障害児を持った母親との接触の中で、私どもの採るべき役割は、みなで共に考え、苦しみや悩みや、また喜びを分かち合いながら歩みはじめることを、呼びかけることに尽きるものと考えている。仲間を呼び集め、仲間同志の触れあいと、支えあいの場を作ることが、母親の傷ついた心に立ちなおるきっかけを与え、外に対して心を開いていく基盤を作ることになると、心から信ずるが故にである。この子たちのために、みんなで助けあって何かをしていこう、その中で、この子たちと共に育っていく道を見つけようではないかと、呼びかけることがすべてであり、試行錯誤ながら、その時できる限りの精一杯の努力を積み重ねている母親に対し、療育の側から単に一方的、積極的に指導をすすめるという形での学習の場を準備したりするだけでは、本来的な形での母親への援助とはなっていないように私どもには思われる。こうした、学習会的な雰囲気は、多少とも強く出ているならば、たとえばアサコの母親のように、かなり確固とした養育方針を持っている場合には、おそらく参加の意欲を新たにすることなく、この集団療育の場から離脱していくようなことにもなったのではないかと思うのであ

る。

ともかく、母親の参加の仕方が、受身的である限りにおいて、その療育の場は、生きたものにはなり得ない。母親が主体的に参加して、自分たちの手で、多少なりとも、この療育の場を作り上げていくのだという自覚が生まれてこそ、母親が、前向きに子育てに取り組もうとする意欲につながるものと考えられる。

このグループが、自分たちのグループであるためには、何よりもそれが、自由で、気楽な場であり、心から安心して解放される場であることが、大切になってくる。個別のカウンセリングと違って、集団カウンセリング的な話し合いのメリットは、何よりも、ほかの人たちとの出会いであり、ふれあいの体験が得られる点にある。対象が、共通に障害をもつ子の母親グループであるが故にこそ、おたがいの人間性に触れて、そこに人間的魅力を感じ合い、おたがいに学び合い、支えあって、成長していくこうとする構えが、そこから生まれてくるものと考えていきたいのである。

今年度、私どものこうしたグループの展開が、必ずしもこの段階で十分であったといい切ることはできないけれども、こうしてみんなで積極的、主体的にこのグループを作っていくこうとする構えが、この1年の療育経過の中から、自然にかもし出されたという点において、評価されるべきであると思われる。

2. 子育ての意欲と自信を回復すること

たとえどのような子どもが相手であっても、子育てにおいてもっとも重要なのは、単なる育児の技術ではなく、喜びを持って、安定したかかわりのできる気持ちと態度の問題であることは、ここで言うまでもない。したがって、私どもがこの障害児療育の場において、それぞれ子育ての技術的な面にのみ目を向け、それに気をとられているという印象を母親たちに与えることは、避けねばならない。子育ては、相手が重度の障害児であろうとも、本質は、難しいことでも複雑なことでもなく、きわめてありふれた、きわめて単純なことであることの認識から始まる。母親がこの子を育てていくことに喜びを感じ意欲を新たにしていくこと、また他者ならぬ自分自身が育てていくのだという決意と自信を身につけることが、この意味において、ここでの当面の中心課題となってくる。必要なことは、一般論的な知識ではなく、個性をもったこの子と共に、母であるこの自分が、どのように歩いていくかという個別的な生き方の確立であり、それはまた根源的な母親性の確立をめざすものにつながる。

子どもが、母を母として認知しているという実感、子どもが確実に発達しているという実感は、母親が子ども

にかかわる喜びの源泉となるものである。今回、私どもの療育の対象となった重度、重複の障害児の場合、彼らの動きそのものが、表面的、現象的に乏しいだけに、問題行動で手を焼くということは、それほどみられないかわり、そうした発達の実感は、また母であることの実感は、ともすれば得られ難い。それだけに、子どもの発達を、共に確認し、喜びあってくれる仲間の存在が、なによりも重要となる。

ユリコのように、発達のにはむしろ、落ち込んでいるとしか思えないような場合にも、母親が、その子の発達を支えようとする際に、自分が決してひとりぼっちではないことを認識し、この子を通じて仲間と知りあえ、深くつきあえるようになったことに喜びを、実感として感じとっていくならば、そこにこそ、この子を育てようとする真の喜びを見出す可能性が出来てくるものと、私どもは確く信ずるのである。

おわりに

子どもたちは、みなそれぞれのペースで発達していく。私どもが、その子のためにできることは、その限りない発達の可能性にたえず目を向け、その生命が少しでも充実することを願って、共に生きようとすることに尽きる。しかし、障害を持ったこの子たちのまわりには、社会の作り出した多くの“障害”が、存在しているのが現実である。それだけに、障害の重い子を抱く母親や父親たちに、そうしたきびしい現実から目をそむけることなく、それにあえて立ち向かい、対決していくだけの構えを持って欲しいと心から願うよりほかはない。ひとりでも多くの人びとに、この子たちの生きる真の姿をわかってもらえるような努力を、私どもは重ねていきたいと、このとき改めて自戒するのである。

「く重い知恵おくれの子どもを持たない人にはわかってもらえない」という気持ちをかなぐり捨て、両親たちが、自分の穴からとび出した時、道は開ける。”両親たちが強くなった時、心に火が燃えた時、足が前に向かって歩みはじめた時、そこに道は開けてくるのである。立ち上がるのは、両親たちである。”福井達雨のこうした述懐は、私どもの胸を強く打つものである。それに相呼応して、私たちのこうした実践を、これからまた、ささやかながら、前進させていきたいと考える。

文 献

- 福井達雨 1975 生命をかつぐって重いなあ 柏樹社
 福井達雨 1978 子供に生かされ子供を生きる 柏樹社
 村井潤一(編著) 1972 障害児の早期教育 ミネルヴァ

書房
中村健二 1972 精神薄弱児と家庭 全日本特殊教育研
究連盟編 現代精神薄弱児講座 5 第2章

西村章次 1975 子どもたちに学ぶ — 障害児保育・教
育の実践から — ミネルヴァ書房
(1980年7月31日 受稿)

THE GROUP THERAPEUTIC PRACTICE WITH THE SEVERELY MULTIPLE-HANDICAPPED
CHILDREN (2)

— The development of their mothers through the group counseling —

Shuji GOTOH, Eiji MURAKAMI, Saiken YUZURI, Akiko FUJIMOTO, et al.

We report here the annual change of five mothers who have severely multiple-handicapped children.

When the mothers participated in our group practice for the first time, they had ambivalent feelings of anxiety and hope. They wondered what would be done for their children. Because of their extremely heavy handicaps, the children had not been offered any therapeutic or educational helps before.

We arranged group counseling for the mothers. We aimed at motivating their active participation in our practice — the management of the group activities and events and so on — in order not to make the group only the place of mutual comfort.

Thanks to the free atmosphere of the group, they frankly talked one another about their complaints and conflicts, and discussed about their children's problem. It seemed that they had a special time free from daily life. In this way, they began to work for "the group of themselves."

At last, the feeling of togetherness deepened in them, opened their mind, and cheered them up so that they noticed the smallest development of their children with joy.

This year, we recognized again that it is necessary for the mothers of the severely multiple-handicapped children to be helped to recover their motivation and confidence, that is, "I do bring up my own child."